

大谷派なる宗門は大谷派なる 宗教的精神の存する所に在り

寺川俊昭

今日から三日間にわたりまして、清沢満之先生の百回忌の臘扇忌の法要が、先生ゆかりのこの大学で、有志の方々の主催のもとに営まれることとあります。私もこういかたちで大切な御法要にお参りする機会を頂いたこととありまして、大変有り難く存じながらここへ立ったこととあります。

ちょうど五十年前の昭和二十七年が、清沢先生の五十回忌でありました。その折は本学ではなくて、岡崎別院を会場に法要が勤められたのでありますが、当時は直門の方々、例えば暁烏敏先生、曾我量深先生、金子大栄先生、藤原鉄乗先生、谷内正順先生、近藤純悟先生などの方々が、山田亮賢先生の大変な御尽力によりまして、心をこめて御法要を勤められたこととありました。あれから五十年経って今年が百回忌であります。当時百回忌というようなことは、頭の片隅にもありませんでした。あれから五十年の御縁をいただいてきたのか、こういう感慨を新たにしていることとあります。

この講堂に清沢先生の肖像画が掲げてありますが、ご存知のようにこれは、『精神界』の装丁を担当された中村不

折という方がお書きになった肖像です。これについて晩年の曾我先生が、いつでありましたか、懐かしそうに言ったらいいのか誇らしそうにと言ったらいいのか、愉快な感想を語っておられました。中村不折さんが、もちろん清沢先生と面識があった方だと思われるので、生きておられた時の清沢先生の御姿、御顔は当然ご存知であったかと思いますが、あらためて肖像画を書くということになりますと、おそらく写真を参考になさったと思いますけれども、やはり生きた人物のモデルがあつたほうが書きやすい。誰をモデルにしたらいいのかということが、浩浩洞の同人の方々の中で議論されたのだそうです。そして皆さんの推薦で、曾我先生が「君モデルになれ」ということで、私がこの肖像画のモデルとなったのである、こういう事をおっしゃっておりました。外観が清沢先生に似ている。外観が似ているというのは、色が黒くて背が低いことだそうです、それを語られた曾我先生は、外観が似ているだけではなく、私が内面に於いて一番清沢先生に近かつたのでありましようと言うて、非常に嬉しそうです。お聞きしていて、やはり自分がよく清沢先生の衣鉢を継ぐ者であるという自重の思いをもっている、こういうお気持ちの表明かと思いましたが、何とも言えない嬉しそうな顔でそういう述懐をなさっていたのを、あらためてふと思ひ出しました。

この肖像を見て、私が最初の著作を発表しましたのが『清沢満之論』でありますけれども、安田理深先生が非常に大切な内容で、先生の清沢論というべき文章を、「序」としてお書きいただいておりますのを思い出します。これをいただいたときに、私は非常に感銘したのでありますが、この「序」を書くために、『清沢満之全集』、法蔵館から刊行されております八巻の全集であります、安田先生はあれを一応全部読んだとおっしゃっておいりました。そして大変立派な清沢論を序文としていただいたことでありますけれども、その冒頭にです、

清沢満之先生の肖像画に凝視するともなく凝視せしめられる。何たる憂うつな面影であろう。その苦悩にみちた暗い表情には、あくまで人間的な現実と、あくまで超越的なる内面的要求との、激しい苦闘の一生涯が一つの形

として表現されているのを見る。森厳なる思いに浸透されるのを禁じ得ない。

〔清沢満之論〕一頁〕

こういう言葉から書き始めて下さっております。講堂に掲げられたこの肖像画を見て、見るものがそれぞれ独自の感想、あるいは感懐を懐くことでありますけれども、安田先生は今の言葉に始まるような清沢先生への思いを、この肖像を見ることを縁としてあらためてお持ちであった。これを思い起こすことであります。

清沢先生を生み出したのはもとより明治仏教でありますけれども、その明治仏教の幕開けと言っていい事件が、明治政府が成立してすぐに発布した太政官布告、「神仏判然の令」であります。これに国家神道の形成を告げるラッパのような響きを感じますけれども、これに触発されて文字どおり「廃仏毀釈」、仏法を廃し、積尊の教えを破壊するというかたちで、神仏分離が進められました。いわば仏教が、ある意味で破壊と言ってもいいかと思えますけれども、やや暴動に近いようなかたちでの仏教の否定、これが全国的な規模で展開をしまいにあります。その最中の明治六年には、「僧侶の肉食妻帯勝手たるべきこと」と題された布告が出ます。今の政府がこういう題の布告を出したら、どういうことになりますか。実際には愉快ではありませんけれども、なかなかユニークな感じですが、しかし政府が、日本の仏教教団は真宗以外は全部、戒を大切なものとして踏まえておりますが、戒の中には当然、不淫戒がありますから、僧侶であるものは結婚をしないということを、原則としてもっているものであります。それに対して政府の命令として「僧侶たるもの、肉食妻帯勝手たるべきこと」という。何たる仏教に対する侮辱であることか、こういう面も思わせます。そういう「神仏判然の令」乃至は「肉食妻帯勝手たるべきこと」、こういう太政官布告に象徴されるような、仏教が歴史的な大きな批判を受ける。これから明治仏教はその歩みを始めたことであります。この辺の状況につきましては、旧著『念仏の僧伽を求めて』をご覧いただければ、有り難く存じます。

そのことが内に持ち、あるいは曝け出した問題性を決つたものに、しばらく前まで知恩院で浄土宗の宗務総長をお勤めになっていた、作家名で言いますと寺内大吉氏の『慟哭の明治仏教』（四恩社）があります。これは非常に鋭いか

たちで、今申したような状況から始まる明治仏教の悲劇的状況と課題を、決っておられます。

加えて明治も十年代になりますと、これもよくご存知のように富国強兵策あるいは文明開化、こういう方針が国是とされまして、国家的な規模での、当時の言葉でいう泰西の、つまり西ヨーロッパやアメリカの文物の国家的な規模での受け入れが進められていきますが、その中に、主としてアメリカの伝道会社を中心とするキリスト教の、これはプロテスタントの方ですが、あらためての日本伝道が、非常な勢いをもって開始されます。当時、これもよくご存知のように、日本に派遣された宣教師は、第一級の人物が多く揃っていました。例えば駐日大使をお勤めになったライシャワー氏のお父さんも、当時日本に来てキリスト教の伝道の先頭に立った方のお一人です。教育の場に立った人として、いまでは伝説化しておりますけれども、北海道の農学校へ赴任したクラーク博士もその一人でしょう。そういう優れた人物が、キリスト教の伝道という大きな使命を荷って日本に次々と来て、非常に積極的な日本伝道を展開していく、こういう状況が広がってまいります。こういうことはよくご存知の通りでありまして、そういうような状況の中で、明治仏教は危機という言葉で表わすほかはならないような、非常に難しい状況の中に投げ出されていきます。当時しばしば言われた、明治の仏教の状況を批判的に語った言葉、「封建の遺物」が想起こされてきます。仏教は封建制度の遺物以外の何ものでもない。急速に近代国家を形成する課題の中では、邪魔でこそあれものの役に立つものではない。こういうような意を含めて、「封建の遺物」という、批判というよりも若干罵倒に近いような言葉が投げかけられまして、その中からですね、「仏教の宗教的生命はなお存するか」という声が、識者によって語られる。こういう状況が広く日本を覆う、或いは日本仏教を覆うという状態になっていったと理解されています。明治十年代、二十年代がそういう状況ですね。

その中にありまして、仏教復興という高い志に促されて、明治仏教を背負って立った志士の気概をもった仏教者が生まれてくるのであります。これが今日百回忌をお迎えして、あらためてその御苦労と恩徳を憶う、清沢満之先生で

あります。志士の気概ということ、先生の生涯を見、また先生が懐いた高い志を憶うにつけて、あらためてつくづく感ずることです。

冗談のようなことで恐れ入りますけれども、幸い鹿兒島の地に、暁烏敏先生の御縁で鹿兒島香草会という会が結ばれておりまして、その会が主催なさって臘扇忌が毎年営まれております。ある年、丁度NHKが司馬遼太郎さんの「翔ぶが如くに」という小説を取り上げて、大河ドラマか何かで放映してありました頃でありまして、鹿兒島の人はもう大変喜んで見ておられました。そこで臘扇忌をお勤めして、いまの明治仏教を背負って立った志士の面影もった方だということをお願いしておりましたのですが、会が終わった後、控え室で休んでおりましたら、和服を召した立派な老紳士、いわゆる古武士然として、鶴の如く痩せた立派な老紳士がお見えになりました。ご挨拶をいただいて、恐れ入りましたが、「鹿兒島の元市長でございます」。こうおっしゃるのです。そして「清沢さんが明治仏教を背負って立った志士の気概を湛えた方だと言われた。あれはよう分かりました」。こう言うて、共感を示して下さいました。なるほどこういう視点も強ち適切でないわけではないのかと、承認を得たような感銘をいただいたことでありました。

そういう面影が、この肖像画を見ても、あらためて感じられてまいります。少し心して明治の仏教の展開、ことに真宗の展開を見ますならば、そこに一つの高い峯の如く聳え立つ存在を、すぐ知ることあります。それが清沢満之という方であります。そして、高い峯であると同時に、明治真宗がその展開の方向を大きく変えていった、明治真宗の転回点というべきものを形成したという大切な意味を持つ存在であったことを、直ちに知ることあります。

その清沢先生がその生涯にわたりまして、いま申した仏教の復興の志を實踐すべく渾身の力を振るって努力されることでありますけれども、今日私はその清沢先生が果たし遂げられた多くのお仕事のなかで、真宗大谷派の宗門改革、ここに焦点を当てて先生の苦勞を偲びたいと存じます。清沢先生の仕事は多岐にわたります。これはもうあらためて言うまでもありませんけれども。殊に最近、たとえば今村仁司先生という方が、専攻が哲学でありますので、哲学の

力の無い私たちが十分にその意味を尋ね当てることができなかつた、哲学者としての清沢満之先生のお仕事を、『宗
教哲学骸骨』にとどまらないで、もっと「純正哲学」等々までを含めて、歴史的に大きな創造的な仕事を果たされた
清沢先生を尋ね、検証しかつ顕揚して下さっていることで、大変有難いと存ずることであります。その哲学者として
の清沢先生の一面と並んで、浩々洞を場として展開した精神主義の信仰運動、これは歴史的な意味を持つ仏教復興運
動の代表的な仕事であつたと思いますが、それとともに大谷派の宗門改革ですね、真宗大谷派寺務革新運動と先生自
身が呼ばれたあの仕事も、どうも私の関心をひく、先生の御苦労の一つであります。

二

私達は清沢満之という方を憶いますときに、非常にまじめな求道の心に生きた方であるとともに、気宇宏大とい
いますか、世界史的な展望なり視野をもつて仏教を見直した人、こういう先生の像を思うことでありますけれども、そ
れについて明治の識者が、清沢先生を評した言葉が、あらためてふと思ひ浮かんでまいります。清沢満之という
「精神一片の人」、こゝう理解されることが多い。信仰、精神生活、そこに純潔に生きた人であるぐらゐの意味かと思
いますけれども、精神一片の人と理解されることが多いのです。しかしながら必ずしもそうではない。「随分策もあ
り略もある人」である。明治の人の表現はなかなか面白いですね。改革運動を進めていかれたあとを見ても、これは
一流の政治家だというような印象を受けられたようで、「策略」という点に於いても、一角のとか素人ではない。
こういう印象をある方が受けたようでありまして、それを表したこの「随分策もあり略もある」という言葉が、当時
の記録を読みまして印象に残っております。

そういえば、曾我量深先生もおっしゃってございました。これはお亡くなりになるほんのすこし前にお聞きした、私
にとりましては最後の涅槃説法でありますけれども、清沢満之という真面目で純潔な求道の精神に生きた方だと、

みな理解している。一応はその通りであるけれども、それだけではない。清沢先生には、とても大きな教化の願いがありました。自分は、精神主義運動は清沢先生における教化の行ぜられた跡だと理解しているけれども、先生は教化の願いそして教育への願いを、とても大切になさっていた。先生は決して、いわゆる狭い意味で理解されることがしばしばある求道の心だけに生きた人ではない。だから清沢先生に大切なものをいただきながら、親鸞聖人の教えを学ぶ人であるならば、決して研究室にだけ閉じこもっておられてはいけません、こう語ってくださいました。それが曾我先生からお聞きした最後の説法でありましたが、そういう非常に幅広い関心の中に、「策もあり略もあり」と評せられたような、レアリスト清沢満之の面目が発揮されたのが、そして同時にそれが宗門愛の表現でもありましたが、それを実践していくというかたちで、今なお白川党宗門改革運動として記憶されている、あの先生の悪戦苦闘が展開していったことであります。

そういう面で清沢先生をあらためて思いますときに、この改革運動は先生が三十四歳から五歳のころ、時代でいいますと明治二十九年の秋に始まって、三十一年の春に一応終結を告げた、足掛け三年にわたる努力でありました。先生のこの改革運動に、当時の真宗大学寮の学生たちも全員参加したのです。それから、これも曾我先生からお聞きしたことでありますが、現在の高倉会館のあるあたりに真宗大学寮の寄宿舎があった。清沢先生の改革運動が提起されたとき、学生たちは全面的に賛同するという決議をして、全員がそれに参加したのです。当時の寺務総長兼教学局長は、今の東本願寺の両堂再建という非常に大きな意義をもつ仕事を中心となって果たした渥美契縁師でありましたが、その教学局長渥美契縁師は激怒して、直ちに全員を退学処分にしたのです。曾我先生の話を知ると、学生はかねてこのことあるを覚悟していたので、直ちに全員寮を退出して、かねてからそのために東山の泉涌寺の塔頭靈源院を借りてありましたので、全員そこへ移ったのです。大八車を何台か借りてきて、布団やら本やらをそれに積み込み、高倉から泉湧寺まで運んだのです。曾我先生が、私も東山七条のあの坂道を、大八車を後ろから一所懸命押したことで

ありますと言うて、若かった頃の懐かしい思い出でありましょうから、苦笑いでなくて嬉しそうな顔をして、懐旧のお話をなさったのを伺ったことがあります。

そういうこともありましたが、しかしながら運動が終結した後ですね、多少事志しと違うたという印象を、学生たちは強く持ったようでありました。その感想を当時愛弟子の一人であった多田鼎師が、清沢先生に洩らしたことがあります。明治三十一年の夏の頃、三河の大谷大学の同窓会である三為会の夏期講習会が、安城のある説教場で開かれました。そこでみなが集まって西瓜を食べながら雑談をしていた時に、多田鼎師が「宗門の革新、竟に望むべからず。予は念を宗門に絶てり」〔全集〕八・三三七頁）こう言うたのです。宗門の改革はもう絶望的だ。だから自分は宗門に絶望した。「予は念を宗門に絶てり」と、こう語りました。清沢先生はよくご存知のように「内剛外柔」で、自分に對しては、自己を律すること極めて厳しく、こういう方であったのですけれども、人に対しては、非常に穏やかで懇ろな方であったと伝えられております。だから他人に対して厳しい言葉で語られることは無かったといわれる方です。ありますが、いまの「自分は宗門に絶望した」と語った多田さんの言葉に対しては、先生は声をあらためて、つまりきつい言葉で、「子、何をかいふ」。君は何を言うのか。宗門に絶望したとは、何たる忘恩の徒か、こう叱られたのです。「宗門亡びなば、末徒それと共に亡ぶ。何の不可なる処かある」。宗門が滅ぶならば、我々宗門に身を置くものは、宗門と共に滅ぶ。それでいいではないか。こうきつく叱られたのです。多田さんはそれを聞いてですね、自分は間違っていた。自分は再建されたばかりのあの新しい本山の大堂で得度の式を受けて、身は僧籍を得たものであったけれども、「心は未だ宗門の徒たらざりき」、こう反省を述べております。得度の式は受けただけでも、その覚悟において未だ宗門の人間になっていなかった、と。その自分に、清沢先生のお叱りの言葉で痛棒を戴いた。こういう述懐を語っておられます。そういう言葉がよく表わすように、清沢先生には非常に深い宗門愛、こういう言葉で表わすほかはない熱い感情が動いていた。これをおもうのです。

どうしてそういう感情を先生がお持ちになるようになったかについては、いろいろなこれまでの研究がありますので、それに委ねましょう。それらを踏まえて考えてみると、宗門を覚悟して選り取る、こういう言葉で表わすほかはないような覚悟を、先生はお持ちであったに違いありません。宗門を選り取る。本願の信を共にするその集まり、親鸞聖人の教えのもとにある信心の共同体を、自分がそこで人としての責任を果たすべき場として選り取る。こういうことなのですが、私は清沢先生における宗門の選り取りに啓発を受けまして、実は宗祖親鸞聖人においてそうであったのではないか、こういうことをあらためて思うようになったのです。親鸞聖人はご存知の通り、ここで申し上げるまでもありませんが、選択本願の行信を共にすることによって、師法然上人と共に流罪となります。信心を共にする、それを縁として運命を共にされたわけですけれども、聖人はそれから退転することはありませんでした。最後まで、二十九歳の時のあの決定的な目覚め以来、深い恩恵を感じられた法然上人の選択本願念仏を法とする共同体に、非常に大切な仏法の現前の場をご覧になってですね、それを自分の生きる場として選り取る、この覚悟を貫かれた、こう感銘することがあります。つまり親鸞聖人の信心がこの信心の共同体を選り取り、そこに身をおいて仏者としての責任を果たそうとする、そういう覚悟を促していったのです。期せずしてそれが清沢先生においても、先生の覚悟として再現し実現している、こういう感銘を私は受けることであります。そういう思いの中で、清沢先生は宗門を深く愛せられた。なぜかという、天職とすべき大切な使命を宗門は持つからである。この宗門の固有の使命、社会的責任である天職とは何であるか。それは、人間の求道の場となること、ここに掛っている。

先生が改革運動を始めたときに、改革の訴えを全国の心ある人々へというので、機関誌として『教界時言』と題する雑誌を発刊されました。その第一号の巻頭に、社説が書いてあります。「教界時言発行の趣旨」と題された文章です。そこに清沢先生の大谷派本願寺に対する感懐が語られます。

況んや大谷派本願寺は、余輩の拠って以て自己の安心を求め、拠って以て同胞の安心を求め、拠って以て世界人

類の安心を求めんと期する所の源泉なるに於いてをや

〔全集〕四・一七八頁

つまり、大谷派本願寺と呼ぶ本願の仏道の共同体は、私が、日本の同胞たちが、そして世界人類が、その信仰、その宗教的な信念の確立をそこにおいて期待する求道の間であること、これが宗門の天職と自覚すべき大切な使命である。こういうものを先生は、宗門に期待するわけです。親鸞聖人御自身が、如来の教法は総じて流通物である、すべての人に開かれたものである、こうおっしゃっておりますけれども、その聖人の教えを一番責任を持って伝承し継承し伝えてきたのは、歴史的に言えば真宗教団ですね。これは聖人の本願の教えを責任を持って伝承するという、大切な意味を持つ団体であります。それを先生はあらためて宗門の真義として覚悟するのです。

少し反復しておりますけれども、先生が大切な社会的使命をそこに見ようとする宗門、そして真宗、さらに明治仏教の全体が、先程言ったような難しい状況の中で、「仏教の宗教的生命はなお存するか」と識者をして言わしめるような、衰弱し危機に陥っている、そういう無惨な姿を曝け出しております。その状況を先生が一人の仏者として身引き受けた時に、仏教の衰退は「僧風の衰退」によると自覚されていくのです。仏教を衰退せしめた責任は、すべて僧侶であるものにかかっている、こういう覚悟かと思われませんが、その衰退の理由としてですね、これは事情を言えば、幾つかの事情が仏教をして衰退せしめたものとして挙げられるであろう。しかし、仏教者という覚悟に立つてみたときに、理由はただ一つ。仏教者であるものの「一心の不安立と自行の不確立にある」。一心というのは信心です。信心が獲得されていない。自行というのは宗教生活ですが、それが実をもっていない。つまり信心は無く、宗教生活というべきものも失われて久しい。名だけとなっている。そういう痛みをもって見るほかはない、仏教者であるものの「一心の安立せざるにあり、自行の確立せざるにあり」、このこと以外に仏教の衰退の理由は無いと覚悟しよう。こういうような訴えを、『教界時言』の中でなされております。非常に厳粛な、「仏教者盍自重乎」という訴えを、私たちは想い起こすべきでしょう。仏教者であるものは、釈尊の大切な法を、ここに人間が真理によって生きる道があ

ると証しすることが願われている。その仏教者であるものに期待され、願われている、そして要請されている、仏法を証しするというのに、私達はまじめにならなければどうにもならない。こういうような痛みの表明であるという感もすることであります。これをよく反省し自らへ誠めながら、仏教の復興の志を先生は懐きかつ表明していった、こう見ることができるとあります。

当然、先生における仏教の復興は、この痛みを踏まえて始まっていったに違いありません。だから何よりも先ず先生は、このことを自分自身に要求しました。それが先生が二十八歳の頃から始めた、先生自身が「制欲自戒の生活」と呼んでおります、いわゆる禁欲生活でした。それを先生自身がまた「ミニマム・ポシブルの実験」と言われておりますが、あの努力です。「近頃面白き実験を試みおり候」でしたか、ああいうのが明治の教養ある人のいいところです。面白い実験と。そう言えば、先生は背が低かった為に、立って並ぶと、暁烏さんや佐々木月樵さんは立派な体格でありますから、見上げなければなりません。人の頭分ぐらい、普通の人より背が低かった。先生はこう人を見上げるのが癪に触ったらしくて、高下駄をいつも履いておられました。高下駄というのは、このごろは無くなりましたけれども、下駄の歯の高いやつです。高下駄を履くと、ちょうど普通の人と背の高さが揃うのでしょうか。明治三十一年の二月に、一応改革派の法主に対する請願書が受理されました。一区切りついたというので、みんな祖廟にお礼参りをしました。その帰りに知恩院の山門の前で記念写真を撮られました。それを見ると、先生は最前列の中央にお立ちでありますけれども、高下駄を履いておられます。そうすると暁烏さんや月樵さんと大体同じ背になっているのですね。高下駄をはいて東本願寺から大谷の祖廟まで行かれたのかと思います。負けないぞというような感じ。この禁欲主義の生活のときは、下駄の歯は二枚あるのですが一枚歯にしておられるのです。下駄の歯は二枚あるのが普通だけれども、一枚で十分ことが足りるといっているので、こんな「面白き実験」も試みられて、実に愉快になります。

つまり、非常に厳肅な求道の心を生きていこうとするのだけれども、そこに何ともいえないユーモラスなものが漂

っておりまして、非常に健康だという感じです。最後は先生、煮炊きをやめて、蕎麦粉を水でかいて、松脂を添えて食べておられたというのですから、まあ見方によっては惨澹たる食生活であります。曾我先生が言っておられましたですね、仏教は安楽の法門ですと。だから仏教を勉強して非常にきつい顔になる方があって、眉間へ縦皺を寄せる人がおるが、あれは仏教の勉強の仕方が間違っておりますとおっしゃるのを、お聞きしたことがあります。横皺はまあいい。しかし縦皺はいけないと言って、仏教は安楽の法門だから、暗い顔していた人間が明るい顔になる、それが仏教の功德なのだから、厳しいという言葉に負けて、あんまり暗い顔をなさいませんようにと、何ともいえない懇ろな注意をいただいたことがあります。

ああいう安楽の法門の香りですね。下駄は一本歯で充分だということを、無邪気に工夫しておられた。健康だなあと思います。しかしこの結果、先生は栄養失調になり、風邪がもとでそれがこじれて肺結核になられたのであります。これも語り部のようなことになって恐れ入りますけれども、明治維新の時の御法主であった厳如上人が、明治二十七年に亡くなられたのです。その時の葬儀が、今の七条警察署がある辺りが両堂再建の工事場で、原っぱだったのですが、そこへ葬儀場を作りまして、屋外で葬儀が行われたのです。その時に真宗大学寮及び真宗京都中学の生徒全員が、黒衣墨袈裟で参列したのですが、全員頭を剃ったのです。この前の前門首さんの御葬儀で、頭を剃った者は誰もおりませんでした。百年前の法主のお葬式はそういう状態だったのです。ところが寒の最中での凄く寒く、しかも寒風が吹きすさび、にわかには頭を剃ったものですから、全員風邪をひいてしまいました。「大谷風邪」という名で呼ばれるような集団風邪ですが、清沢先生も風邪をひき、それがこじれて肺結核になっていったのです。だから、清沢さんが肺結核になられたのは、厳如上人のお葬式を縁としてなのです。こういうようなことを想い出しますと、何ともいえない感じがしてまいります。そういうはからざる結果になった先生の制欲自戒の生活は、先生自身が「仏者であるものは質素であれ」という俗諦勤儉の教えがあるが、自分はその俗諦勤儉の教えを、多少まじめに実行

してみたい。それに託してミニマム・ポシブルを実験する。しかし愉快的実験である。こういうような、ゆつたりとした厳しい実験というかたちで、僧侶であるものの生きる姿勢を吟味していくことに着手しておいでになります。

三

同じことを宗門に期待したとき、そこに宗門の改革が提起されました。大きくは世界人類の、小さくは私の安心確立をそこにおいて期待する宗門が、宗祖である親鸞聖人の御精神に適うような宗門でありたい、なければならぬ。然るに現状は反親鸞と反省するほかはない頹廢状況を、いたる所に曝け出している。痛ましいではないか。その宗門が自らの姿勢を正す、こういうことを宗門全体に期待したときに、あの宗門の改革を余儀なくされたのである、こう理解されます。これを経てですね、やがて宗門の最も大切な仕事は教学、つまり教育と学事なのだが、その教学の場として、改めて大学の水準における仏教の研究を進めなければならぬ。そのために真宗大学の東京移転と、近代の大学としてのその内容、つけの仕事が進められていくのです。そしてその仕事の傍らにこれこそ縁が熟して、浩浩洞に集まった後輩の青年の方々と一緒に、精神主義の信仰運動が展開して行きました。その出発点は、先生自身が自分自身に制欲自戒の生活を求め、宗門自体にその革新を求めた、そこから始まっていったのです。それを敢えてした先生に動いた宗門愛が促す責任感ですね、宗門人としての責任感とその発露、これが感ぜられてなりません。

この宗門改革運動は、全宗門を激しく動かした改革運動でありますから、そういうものが起こるについては非常に複雑な事情が絡みますので、単純ではありません。いろいろな事情が絡み絡んで、遂に先生をして宗門の改革に立ち上らせたのですが、その辺のことについては、大変失礼ですけれども、早く出した私の『清沢滴之論』に事情は細かく纏めておりますので、お読みいただければ有難く存じます。これは昭和四十八年に出了したので三十年ほど前の研究であります。お読みいただければ、大谷派の苦勞がどういうものであったか、多少お知りいただけるかと思

ます。

大まかに言えば、いま真宗本廟の両堂の屋根の修復という大切な課題が日程に上っておりますけれども、あの両堂の再建を十数年の歳月を経てですね、当時の大谷派はやり遂げました。しかしやり遂げるについては、無理に無理を重ねたのですが、その無理をしたことが醸し出したさまざまな頹廢状況が、先生をして宗門の現状を痛ましめ、そして改革へ立ち上がらせていった事情であつたように思います。今日の講演の題に掲げた「大谷派なる宗門は、大谷派なる宗教的精神の存する所に在り」であります。この発言は改革運動の最中に、「大谷派宗務革新の方針如何」、つまり改革運動をどう方向づけでやるのかという題で書かれた文章の中にある言葉です。「試みに問ふ。大谷派なる宗門は何れの処に存するか。」こう問うて、「京都六条の天に聳ゆる巍々たる両堂と、全国各地に散在せる一万の堂宇とは、以て大谷派となすべきか。曰く否」。こう書いてあるでしょう。京都の六条の地に清沢先生が見ていた頃の本願寺は、「両堂が再建された直後であり、まだ現在のような門も塀も堀も無かつたのです。両堂が原っぱにそそり立っている。しかも再建直後でありますから、まだ木のような門も塀も堀も無かつたのです。両堂が見ながらですね、あれが大谷派の宗門がある処か。曰く、否。あれは「火以って焼くべきなり」。火事になつたら焼けてしまう。現に元治元年に禁門の変の兵火にかかつて焼けたのですから。だから「火以って焼くべきなり」と清沢さんが言っているときには、三十数年前に兵火のために焼け落ちたときの、何ともいえない凄まじい状況が生々しく記憶されているような状況の中で、「火以って焼くべきなり」というのですから、実に実感を込めた言葉です。その焼失した両堂を、非常な無理をして再建を果たした。しかしそこに、痛むべき事態が、さまざまな形で曝け出されてきた。それが、これではいけないというので、先生をして改革運動に立ち上がることを余儀なくした直接の事情であつたように思われます。

宗門の最大の仕事は、人物の育成である。これは先生が実感をもつて感じていたことです。先生はご存知のような経歴を経ておられますが、明治十年代に東本願寺が開いた育英教校で学ぶ縁をいただかれた。そしてこの育英教校で

学ぶことが縁となって、東大で学ぶ縁をもつことができた。そういう自分の体験を踏まえて、宗門が為すべき最も大切な仕事は人物の育成に尽きるといふ確信をもっておられたように思います。ですから、両堂再建がなつた今、宗門が全力を投入して行うべきは人物の育成である。そのためには宗門の学校制度を、その願いを実現するような独自の学事体制に編成していかねなければならない。こういうので大学の先輩の沢柳政太郎氏に依頼して、大谷派の教育制度の全面的な刷新に着手し、推進していかれます。ところがこれが宗門のいろんな事情によつて、思うように進まない。それがややこじれて、人物の育成という、宗門が全力を挙げて取り組まなければならない仕事を妨げるような宗政とは何ぞやということで、宗政の改革に一步踏み出さざるを得ない。こういうようなかたちで改革運動が始まつていったのです。

先生はよくご存知のように、宗門が全力を挙げてなすべき事は教学の振興である、こう言われます。現在使つていふような意味での教学というよりも、教育と学事という意味で、教学という言葉が使われたかと思いますが、大切な先生の発言でありますし、歴史的意味をもつ発言とも思われますから、そこだけを読みますと、

抑々余輩の所謂根本的革新なるものは、豈に唯だ制度組織の改良のみこれ云はんや。否、制度組織の改良は寧ろその枝末のみ。其の称して根本的革新といふものは、実に精神的革新に在り。即ち一派従来の非教学的精神を転じて、教学的精神と為し、多年他の事業に専注したる精神をして、一に教学に専注せしむるに在り。夫れ教学は宗門命脈の繋る所、宗門の事業は教学を措いて他にこれあるを見ざるなり。財政の整理や、内事の肅整や、亦た皆な此の教学振興の為の故のみ。故に宗門の当路者たる者は、常に教学の二字を其の脳底に牢記して、須臾も之を忘失すべからず。

【全集】四・一九一頁

こういう訴えです。趣意は読んですぐ分かる通りです。

ところがここで先生が、宗門がその命脈が繋るところである教学を振興する精神を放棄して、長い間にわたつて、

「多年他の事業に専注してきた」と言っておりませんが、それが両堂の再建だったのです。すると清沢先生をして宗門の改革を促し余儀なくさせたもの、その事情の背景にですね、いまの両堂再建があることを私達は知るので。この辺りは複雑な事情ですから、断片的に申していてご迷惑と思いますけれども、明治十四年に起工式を行い、工事終了が明治二十七年であります。日清戦争の最中でありましたので、落慶法要は戦争が終わった二十八年に勤めたのです。それから大門、塀、堀、書院群は、明治四十五年の親鸞聖人六百五十回御遠忌の折りの建造なのです。だから清沢先生の中には、本山はさつき言った両堂が建っているだけなのです。もともと大寝殿は建っていましたが。

この両堂はいまから百年余前の京都の、或いは日本の木造建築から言いますと、画期的な大建築でありまして、あれが完成した頃、日本の代表的な新聞である『朝日』、『毎日』、『読売』などが、繰り返しあれを報道しております。当時の新聞の言葉で言ったら、大谷派の「二大偉業」として、マスコミの非常な関心をひき、繰り返しその報道を生んでいたのです。その「二大偉業」の一つは両堂再建ですが、もう一つは負債の償却です。明治二十一年、再建工事の最中に大谷派がかかえていた負債は、三百三十万円を越えていたと言われております。仮に当時の一円が今の一万円として、三百三十億です。今の大谷派が三百億の借金を持ってたら、よほど厳しいだろうと思います。いまの経常予算が百三十億円ですから、経常予算の三倍に達する借金をかかえておれば、なかなか厳しいことはお分かりでしょう。両堂の再建で莫大な再建費を必要としながら、併せてこの借金の返済もやったというのですから、マスコミにとっては格好の報道材料であったと思います。借金の返済が偉大なる事業なのかどうかは難しいところですが、両堂の再建は偉業ですね。大谷派というの中々大したことをやるではないか。大体はこんな論調でありました。

ところが外から見たらそうでしょうか、しかしこのために宗門は大きな犠牲を払わなければなりません。心ある者であれば、宗門が両堂再建と負債の償却に払った代償の無惨であることに泣け。こういうようなものを、清沢先生達は感じたのです。この二つの大きな仕事を果たし遂げた、その衝に当たった宗門当事者が、二大偉業をやり遂

げたことにやや傲った。高ぶった気持ちを持ち、傲った。それが清沢先生達を悲痛させたのです。宗門の現状を見てみよ。お金を集めるためにどれほどの苦勞があつたことであろうか。苦勞し八方手を尽して、ついに当事者は寺格・堂班を売るということをやつたのです。この明治期の両堂再建期に、宗門の寺格は大きく変動し、大規模に上昇しております。そして僧侶の身分である堂班についても、事は同じです。こういう目も当てられないような頹廢状況を沢山生みながら、二大偉業は果たし遂げられていった。宗門当事者の目には、貧乏な末寺の任職が、飢えに泣く子を抱えて困惑してる姿が見えないのか。こういう深い痛みをおさえかねた強い表現での訴えも、かなり書かれております。要するに無理をした。その中で、黙視しかねる、これはあまりにもひどいというかたちで先生が指摘したのが、「財務の紊乱」と「内事不肅」であつたのです。こんな事はかり言つていてもどうかと思ひますけれども、二大偉業を行うときに、厳密な収支決算をしたのであるか。こういう問題の指摘もなされています。

それから当事者はやや傲つてと言いましたが、両堂再建を成し遂げることによりまして、明治十七年に国家の指導によって、各仏教教団はそれぞれの教団の基本法というべき「宗制寺法」を作りますけれども、大谷派はこの宗制寺法によって、現在は制度を変えましたけれども、この前まであつた法主管長制を整えたのですが、これが実質を持つていくのです、両堂再建を通して。そこに生まれたやや傲つた傲りの表現が、大谷派は日本仏教教団中最も専制的な宗門である、最も中央集権的で専制的宗門であるという烙印を押されることになるのです。当時、西本願寺は宗議会を持つておりましたが、大谷派にはそれが無い。宗門の当事者が恣な宗門運営を行っている。

もちろん改革運動の一番の主眼は、不振に陥つた教学を振興することなのですけれども、そこが先生の一宗門人としての実感と、それから全国的な規模で宗門の改革を訴えていくためのいわば必要とされた配慮でしょうね。教学の振興だけを掲げたのでは、宗門改革運動にはなりません。あれは学者連中の騒ぎだということになります。ところが財務の紊乱となりますと、やはり当時の門末が関心を持たないわけにはいかない課題ですし、有司専行、つまり寺務

総長の独占的な宗門運営ということも、宗門人の不満がくすぶるところです。それに加えて、「内事不肅」です。これは法主である人の品行が新聞・雑誌に無遠慮に取りざたされていった問題です。それを「内事不肅」というのは、内事局長・渥美契縁師の責任ではないかという問題です。実際に新聞へ出たのは、大谷派本願寺の法主の品行という記事ですが、さらに当時、たまたま政府の方から爵位を授与するという連絡がありました。就いては東本願寺は受爵を希望されるかと。そういう内々の連絡を受けて、宗門はもちろん公爵を希望しました。明治に制定された日本の貴族制度に、いわゆる「公侯伯子男」と、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵という位階がありますね。大谷家は九条家と深い関係を持つ家であるが、九条家、近衛家は公爵なのだから、当然大谷派の大谷家は公爵に叙せられるべきだと要求しましたが、政府はそれは認められないということで伯爵に決めたのです。それで非常に不満であつたけれども、やむをえないというので受けたのです。それを新聞は取り上げて、「大谷派法主、天爵の貴きを忘れて人爵に諛る」と報道しました。法主というのは、親鸞聖人の教えを継承し、仏法を継承するという、世俗の位を超えた尊い意味を持つた位ではないか。天爵、天が授けた世俗を超えた尊い位ではないか。その尊さを忘れて、人間が作つた爵位におもねつた。何たる不見識かというような報道です。不適切な言葉ですみませんが、大谷派の法主というのはそういう尊い位置にありながら、高利貸と同じように募財を事としておられるのかと、こういうような言葉さえ言われるような状態でありまして、「世の侮辱を受くること、今日よりも甚だしきはなし」と、心ある宗門人を悲泣させるような事態が、当時の新聞を出してみたら、すぐ目につくのです。清沢先生は腸がちぎれるような痛みを感じると歎いておられますが、それを放置させているのは、当事者たる内事局長の責任ではないか。宗門人たるもの、これを涙なくして見ることができないではないか。だから当事者の責任を問う。財務についても、予算決算はきちんと行われているのか。門末の血と汗を絞って、しかしながら厳正な会計の処理も行われていない。黙視できないではないか。こういうような極めて実際的なことを、清沢先生はやっているのです。だからなるほど「精神一片の人にあらずして、随分策

もあり略もある」人であるということ、を当時の識者が言っているのも、なるほどむべなるかなという感じですね。

こういう、先生をして「九腸寸断」の思いをさせた、宗門の痛むべき現状を目の当たりして、先生はしかしながら粗探しをするわけではないのです。これが本願他力の宗義、つまり親鸞聖人の本願の教えを継承する最も重い責任をもつ、宗門の現状であるのか。心ある者は泣け、こういう感じなのです。それを訴えたのです。そしてそれを通して先生の改革運動の方針は、宗門内議会制度の確立、ここへ凝集していきます。簡単に言えば宗議会を開設すべきである、こういう要求です。これはもう西本願寺は既に明治十年から始めておりますし、国家は憲法制定によって明治二十三年から始めております。大谷派は明治三十一年でありますから、遅れてはおりますけれども、国家と西本願寺のモデルというか先例がありますので、それを承知しながら制度としてはああいう形で宗門の運営を末寺住職が参加する形で行うべきであると要求していったのです。立憲君主制ですね、国家で言う。ああいうものを「末寺会議」という名で開設して欲しい、こういう要求に凝集していきました。その中で、中には激しく門末総会議を要求する人もありました。門末総会議というのは、いまの宗議会と参議会を一つにしたような形です。これは時期尚早と言わざるをえない。先ず末寺住職が宗政、つまり宗門の運営に参加する体制をつくること、ここから始めていこう。こういうようなことであつたのです。

今の、大谷派の宗議会は、清沢先生の宗門改革運動が生み出した成果なのです。但し、最初、石川舜台師が中心になつて議会を作つたときには、議制局という名でした。それが時を追うて議制会、そして宗議会と、こういう名称になつていきますが、議員は「賛衆」といいました。字を知らない我々は、「賛衆」というのは賛成する人かと理解して、なかなか意を得た、妙味のある言葉遣いではないかと、笑つておりました。

しかしこれについて、清沢先生は宗門改革運動を行つたけれども失敗した、挫折した。こういうのが、大体定着している理解です。しかし私はそれは少し一面的に過ぎると考えます。もちろん意の如くならなかつたという痛みはあ

ります。しかし大谷派がとて議会という形をとって末寺住職の参加による宗門の運営に着手したわけでは、やはり歴史的に見て、肯定されるべき大切な実を結んだというのが、正当な評価ではないかと思えます。もちろん宗門に議会があるのが本当に適切なものか、もつと違つた制度が適切なのではないかという議論はあり得ます。しかし当時の「有司専行」、当事者の独断専行、こういう言葉に凝集するような宗門体制の混乱の中からすれば、やはりこういう形で宗門運営は図られるべきだというのは、良識の声というべきではなかつたかと思われまゝ。意の如くならないのは、それは清沢先生の責任ではなくて、宗門の責任なので、あんまり失敗したとか挫折したということを書き過ぎるのは、歴史認識として私はすこし主観的に過ぎるということ、このごろは感じます。

四

その後の大谷派の宗議会の歴史は、必ずしもマイナスばかりではありません。句仏事件の折にも、いろいろと大切な役割を果たしております。ただこういう形に凝集していった改革運動を通して、先生はいろいろな問題を、これが宗門かという痛みとともに見ていったのです。その一つが、法主制の問題であつたのです。『教界時言』の中に、「師命論」と題された論文が書かれています。「宗門の師主」である法主の命令とは何か、これをテーマにした論文です。これは運動の最中に書かれていますので、表現はややきつくなつておりますが、この論文で何を言っているかといひますと、「議會制は大谷派の固有の宗風に合致しないから、永世これを認めてはならない」（『大谷派本山近年事情』取意）と伝えられる厳如上人の厳命があつたということです。したがつて宗門当局が言を左右にして、改革派の議會開設の要求を受けられない。何としても拒否するわけです。宗務総長がかたく拒否する背後には、御法主の意向があるといふことは、すぐ分かるでしょう。そうすると、御法主の意向とは一体何であるか、これを問題にしたわけでは、法主には私的な言行があつてはならない。法主は公人であり、公の職である。したがつてそれに伴う責任がある。

公人としての法主の命示は、全宗門人が襟を正して聞くべきものである。しかしながら法主の意向・発言・行動は、これは公人の行為であるから個人の恣意に発するものであってはならない。個人的な言行は、たとえ法主である人の言行であつても、師命としての權威はもたない。こういう主張なのです。なるほど法主制に対する歴史的な反省が、こういう形で始まつてきたのかという事を知りますね。

それからいま一つは、「宗学」と袂を別つという決意を取って表明せざるをえなかつたことです。それを論じた論文が、「貫練会を論ず」と題された論文です。貫練会というのは、いまま高倉会館の講堂に貫練堂という額が掲げてありますが、あそこが高倉学寮の講堂でありました。それに困んでつけられた会名ですが、当時の宗学者が全員、貫練会という会を作つて、清沢先生の改革運動に対する反対の意向と姿勢を表明したのです。加わらなかつたのは南条文雄先生、村上專精先生という、特定の方だけだつたようです。あとのいわゆる宗学者の全員が貫練会に参加して、清沢先生に同調しない、むしろ反対であるという姿勢を表明し、清沢先生たちの立場を「伝統の宗意に改竄を加えるもの」と批判したのです。それで清沢先生は、大切な使命をもつ宗門が、本願他力の教えを最も責任をもつて継承すべき宗門が、本当に宗祖の御心に適うような宗門でなければならぬと願つて、若干の見解を提示した。それを理解せずに、反対し拒否する、これは何事であるか。その事がかもし宗学に由来するとすれば、宗学に自分は別れを告げるほかはない。ほぼこういうような趣旨です。我々が依るべきは、『教行信証』にはつきりと示された宗祖聖人の仏法の御了解である。これを宗義と呼ぶべきであろう。それに対して末学の研究は、これは宗学であつて宗義ではない。これは参考にするべきものであるけれども、しかし扱ふというわけにはいかない。扱ふべきは宗義、学ぶべきは宗学というか、宗学はやはり学ぶべきものであつて扱ふべきものではない。それにもかかわらず宗学を学ぶ人達が、伝統の宗学を權威とし正意として、自分達が訴えている、襟を正して宗祖聖人の御心に適うような宗門でありたいと願う、この願いをどうして理解しないで拒否なさるのか。これはむしろ痛ましいではないか。こういうような感じが溢れた

文章が書かれましたのです。これがやはり大谷派の親鸞理解を、新しい場面で開拓していく突破口或いは第一歩となった、先生の見解の披瀝という感銘が強いことであります。

そしてこの二つの問題提起とともに現在の宗門にとって、なお生きた課題と理解すべきものであります。もう時間が来ましたので残念でありますけれども、こういう苦勞を重ねながら先生はあらためてですね、大谷派の宗門の天職として、人間の求道の間となることを、力をこめて訴えたのです。そして痛むべき宗門の現状を反省しながら、宗門がこうあつて欲しいという形と方向を、自分はいささか申し上げた。そこに残念ながら混乱も引き起こしたけれども、こういう苦勞を経てあらためて考えていこうと提起したのが、この歴史的な問いでありました。

試みに問ふ、大谷派なる宗門は何の処に存するか。

京都六条の天に聳ゆるあの本願寺がある処、そこが大谷派という宗門のある処であろうか。全国に七千ヶ寺の末寺が展開しているところが、大谷派という宗門の存する処であろうか。大谷派に僧侶の資格をもっているものが三万人いる。その三万人の僧侶のいる処に、大谷派という宗門があると心得るべきであろうか。それとも全国に百万戸の門徒があるといわれているが、その百万の門徒のいる処、そこに大谷派なる宗門があるといふべきであろうか。こう一々挙げて、「曰く否」。そうではない。建物は火に焼け、水に流される。人は名前を懸けているだけの、つまり有名無実の僧侶と門徒は残念ながらたくさんいる。そんなものは当てにならない。そうすると、間違ひなくここに大谷派と呼ばれる宗門がある、こう言える大切な自覚的な場は何であるか。これを問うて、自分は、

大谷派なる宗門は、大谷派なる宗教的精神の存する所に在り。豈に人員の多寡を問はんや。豈に堂宇の有無を問はんや。將た豈にその顛を円にし、その袍を方にするや否とを問はんや。苟くもこの精神の存する所は、即ち大谷派なる宗門の存する所なり。而して、大谷派なる宗門の盛衰は、実にこの精神の消長に外ならず。

こう確信するというのを、先生は尋ね当てたのです。

大谷派なる宗教的精神と、ここで独特の言い方をしております。宗教的精神というのは普遍的な信心のことであります。それが、それに大谷派という限定をつけたのは、大谷派と呼ばれる宗門が、ある意味でいのちとして伝えてきた、親鸞聖人の本願他力の教えによって獲られた信心、これを大切に思うからです。宗門がよく聖人の教法を相続してきた恩恵を思うからこそです。だから宗教的精神に、「大谷派なる」という限定の言葉を敢えてつけるのは、こういう見解だったと思います。

その「大谷派なる宗教的精神」の具体相が、先生のその後のさまざまな言葉で表明されていきます。一番典型的に示されているのが、「真宗大学開校の辞」に語られた、「我々が信奉する本願他力の宗義に基づきまして、我々に於いて最大事件なる自己の信念の確立の上に、其の信仰を他に伝える、即ち自信教人信の誠を尽すべき」精神ですね。これをこそ「大谷派なる宗教的精神」と呼ぶべきであると、これに凝集して理解していいと思います。もう時間が来ておりますから、もう一言で終えますけれども、清沢先生がその膨大な著作、あるいは講話の記録の中で、親鸞聖人の恩徳を最も強く憶いながら書かれたもの、それが絶唱というべき「他力の救済」です。

若し世に他力救済の教なかりせば、我は終に迷乱と悶絶とを免れざりしなるべし。 (『全集』六・五八頁)

こう表白されている通りですね。その「他力の救済」を読みまして、ここに述べられているものが、大谷派なる宗教的精神の一つの具体相であると了解すべきであろうか、こういう感を深くするのは、そこに「他力の救済を念ずる」、本願の救いを憶念するといわれておりますが、その本願の救済を憶念する道は、もちろん南無阿弥陀仏と称名念仏するところにあることは、これは真宗の伝統であります。だから「我、南無阿弥陀仏と他力の救済を念ずるときは、我が処するところに光明照らし」、こういう述懐なのです。つまり念仏の信心の吐露と聞くべき、先生の信心の表白です。その中に先生は、自分はこの他力の救済を念ずることによって、

迷倒苦悶の娑婆を脱して、悟達安樂の浄土に入らしむるが如し。

〔全集〕六・五八頁

と述懐されます。あれを私は清沢先生の念仏往生というか、往生の信の表白と聞くべきだと理解するのです。身は迷倒苦悶の娑婆に生きているのだけれども、それを超えて、他力救済の念は「悟達安樂の浄土に入らしむるが如し」。あれが往生道を語った、非常に意味深い言葉でしょう。さらにそれを受けて、

今や濁浪滔々の闇黒世裡に在りて、夙に清風掃々の光明界中に遊ぶを得る

〔全集〕六・五八頁

と述べられました。「清風」、すがすがしい風。これは涅槃の香りのことでありますから、涅槃の風が吹き、涅槃の香りが薫る。その涅槃の風がさわやかに吹いている広やかな光の世界に、遊ぶが如く悠々と生きることができ。これは、完全に「悟達安樂の浄土に入らしむるが如し」というその感慨の、重ねての表明であるに違いありません。そうすると、涅槃の風がさわやかに吹く光の世界に、遊ぶが如く悠々と生きることができるとするのは、『歎異抄』の「念仏者は無碍の一道なり」(『真宗聖典』・六二九頁)というあの風光を、先生は語っていると思われ。そしてこれが、浄土あるいは往生浄土の自覚道の、非常に体験的で率直な表白にほかなりません。ところがその如来光明中に生きる、あるいは広やかな如来の光の照らす世界に生きる、この目覚めを獲た人は、自分だけではなく、一切衆生が如来光明中の同朋であることを信ずる、こういう自覚を展開していくのだ。念仏の信を獲た人は、自分自身が光明内存在に目覚めたという深い感謝をいただくのだけれども、それにとどまることはない。一切の衆生が自分と同じように、如来の光明の中に照らされ生かされていると信ずるのである。自分は一切の衆生が、如来光明界中の同朋たることを信ずる。こういうことを「他力信仰の發得」という、明治三十二年に書かれた文章の中で、先生は記しています。この「同朋」という言葉が大切に語られるのは、真宗の歴史の上で久しぶりだという感銘であります。

これをさらに最晩年の『当用日記』の中では、「同朋」という言葉に換えて、「兄弟姉妹」という言葉が使われます。こういう、如来光明中の同朋であるという一つの感銘深い覚知を獲たものは、同朋であるものが互いに「相愛相扶の

「親情」を持ち合うことが求められていきます。「臘扇記」では、「同朋間の同情」が「大要義」であると語られます。それが同朋の覚悟に目覚めた人の、最も大切な生き方であるとされるのです。のみならず、自分の言うこの「同情」とか「親情」は、大悲心に源泉を持つ心である。だから「常行大悲」という伝統的な言葉で言い直してもいいかと、了解されてくるのです。この大悲心に源泉を持つ「親情」あるいは「同情」を持ち合うこと、これが如来光明中の兄弟姉妹であるという、感謝するほかにない目覚めを獲た者に期待される生き方である。これを「仏の命示」と、自分はいただく。ここに、覚悟して自分の人生を捧げていきたいのであると、こういうような覚悟を展開していかれたのです。その全体が、大谷派という宗門を實現していく宗教的精神であると、このように先生は最晩年に至ってはつきりと尋ね当てて下さったのであります。信心がそのように、大谷派と呼ばれる宗門つまり信心の共同体を求め、その現前を願う。それが念仏の信心の大切な意味であるのか。こういうことを、先生の断片的に記された言葉でありますけれども、それによってあらためて大切に教えられることであります。そういうことが百年前の清沢先生によって、尋ね当てられているのであります。

私達は清沢先生を大切な先輩として、いることでありますけれども、先生が開拓されたこういう非常に創造的な宗教的精神、本願の信の積極性を、私たちはよく学んできたであろうか。こういうことをあらためて自分に問いかけ直すことであります。そしてそういう大きな教示をいただいで、百年前の清沢満之先生の、本当に開拓的な親鸞聖人の精神への回帰ですね、その恩恵をあらためて憶うことであります。

不適切な言葉やら、雑談めいたことを数多く申しまして失礼致しましたけれども、先生の百回忌をお迎えして、あらためて先生から我々に期待されると了解することの一端を、思うままに率直に申し上げたことでございます。有り難うございました。